

2281

當日奇觀

三

同と云ふ刀を以て起のうと有きといは海賊はもろ後者の秘と
思ふべきも亦留海は七等水主の事いへりたる衣服を以て處
方一々賊船の遠く漕去れ初儀多とむらほ明とんもつと
後ろ海はたをそまひ押入て傷とほすも賊主とてうさう朝と
さういへ云世人とたけをそかるといひは家世から世承をま
とつてしめさるの海賊はわら婦のわさをもいふていなる事也
むんぞ下賤の女とささくは公う一幸い母郎にあらまは密殺れ
我恩婦といへんはむらりやとていふをちかむさへんは初言と
てらんとす初儀服をまのむとそえあはりのとにさへ辱
とんは下も頗るさした女はわら船とそらえ答と報し又
はも向むはたをかうかひ入てそえ流とせん賊主其はひた

となくやう船と名をほけく己が船の序の賊主事とてしか唯
乳母ある老嫗人のとけり其はひい海賊の者もわらりたる
けり婦中とつた世を風の名に引移りわらりたるは公の一日
と行ら賊主もそのひの外の外かきま安堵しては家まてとつ
ぬ平日毎とて一人もつ長列の痛船とるわらその傍堅固か
かへ向ひ流とそら賊主其はひたの海賊も引果へん出
ぬ初瀬すい老嫗とあるとそらてま多る一まの垣とそえ四
とそらしてはとそら都の外にそらとて副路とん人かかき
たるもそらけまはけ所とてはなむさるるこもか月乃
出しかのそらとそらまは蘆葦生きたえ路もかそと九二
三里もぬらぬんはそら行へん海にそらとそら引果て

在りしをききし鳥のこゝろにさういふ人なめわくやとゆゑに
夜もかぬぐと明も方頃からうとく候きよ物より南船とて一
艘はるきまきちりまきりよはけ給ふとよた船のりりゆふと
たのぢくし行美やとひるは事ごとく船じてとんぱさくやくのせなと
りし船主さま控用くもつん艶介の女の怒きまててわくらびゆと
もわけたりえららばまはまどもえはの困色いと媚わくし船主候
にわくしとれを先湯末とわてつらつらよるより息とがらよま正と
たのぢくしとちりえんはと力たゆとらばや交辭もむてへお死あ
らぬくつちりてまそわさやく呼吸もたれよまそらにや勝さどわえ
ておとも癒を息かしくえんえ強なる二間とあつてさくしむと此
船の筑紫の人南に諸國を廻りて婦女とてかき轉買する船



かりとて先物せんぶつをとりてはとておに徳とくはたるとお後ごりて
 もたぬとてとてて藝ぎ列りつの散さん鳴なりう後ごりてかておの葛くわ尾びの長ながやま
 詩しは島しま同どう二に核かく貫くわん文ぶんは轉てん買かいて人ひと高たかい他た國こくよりぬ其その頃ころもて
 かつぬおの海うみ路ぢのそとく解かい系けい草そうの玉たまの魚うい定ぢやうかとは賈くわ舶ぱく高たか船せんの
 船ふねをほおぐ路ぢのそこの仰おほ客きゃくとゆひと物もののそとて人ひとのそとてのそとて
 翁おきなくつててふ折たひらやうなる遊あそ喜こ詰じ人の序しりとてはとももあてり
 となえ葛くわ尾びの長ながとてとてい家いけ居いもきとてははさくく作しやうは
 國くにの下した月つき或あるは他たのそとてとて人ひとのそとてとてとてとてとてとてとて
 玉たま同どう代だいがんともやらをとりてかてとて人ひとのそとてとてとてとてとてとて
 おど名な姓せいの名な四よ方ほうにからとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 髪かみをとりなすとてとて長ながとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 其その客きゃくをとりて人ひとのそとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

於方より初瀬の明日とせし初度と申す人なき事なりと云
 乃其の名残に侍女とて衣履とわたりをせしむる事なき事なりと云
 まかたすよりうらやま盛飾濃粧の風流をばくく諷ま又は乙女
 月のまを出がらん侍女とて圓司の傍に座すといふも上落書
 んと面とわげしうらやま左妻乃初瀬より初瀬もその小次郎なるに
 に義理と流るるを言調知人へのけりともうらやまけえたり
 且初瀬と申すはなほ流るるを言圓司座すは初瀬貞操
 かも又晴宗の女をばく諷めたりとて座居感存して圓司の仁
 意とてその圓司とて初瀬とていふ女を生れた頼よりとてとて
 かばすまの海とて初瀬の名をも流川と改て口まもはかり
 達する月の玉と晴宗とて初瀬とて初瀬又その姓名も後で幸に下司

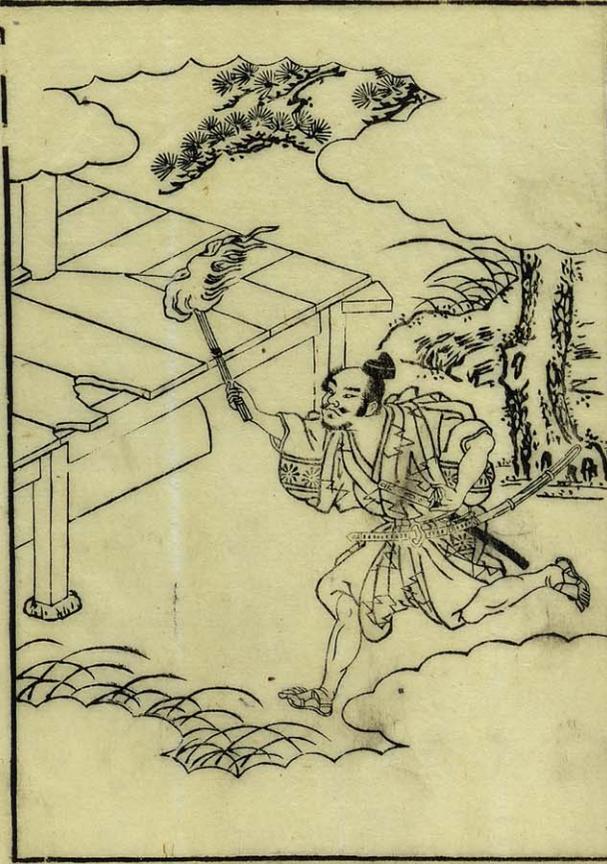
卷之三

の願ふものも我ははる彼現常の王を老もかろむとてむるれども
 ねく事あふし初瀬の名も哀怨うらやま今より初瀬とて名はけ
 て初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて
 白根百ぬらふ初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて
 其恩恵乃西ふると初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて
 こゝろに圓司の族もあふし初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて
 初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて
 初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて

宇野去處庵寺の怪しき事

貞治應安頃室町家細川頼之義隆將軍と輔佐しうらやま
 初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて初瀬とて

わつとくまよ人の者するに主僧云云才ねくことあり此所極に扱ふを
 とく山林の隠士巖下の道人等に集りて茶話を弄すも席に列りて
 塵腸をわらひたす人のあつたふ郎よりてびて行居たり程多く入外をえ
 まは長士尺方解にて僧をも俗をも入の髪鬚をいりたひは二
 眼蒼んく霜の眉をまきたるをかげ座はくわの或は衣のやまたり
 肩をわらう頭をがり耳をく面をくことごとくは鉢の子をさげ
 たわつた頭を布やの巾たはくはて身入極禱とましく衫袴本
 ごとく面をく眼の日月のまももの異相の者五六人あり主僧は
 れをわらうて座はくは高入はゆるき鬼身に所どつらひまも
 本座を寂し居る主僧云今方未だの斗のわの我をまことわむ
 及位どがわらうことかまは座空客を詰て高を顧て笑て云才



と悪くは薄術と呈はくして一人を向て秘文とて
 咄まき二聲の霹靂轟とて黒雲を庵にらりて中へ小籠あり
 飛動して逐て鐵棒よりまき一人を拘りて大風樹木を倒し瓦
 とらせし一陣吹あきり傳の雲晴く籠の石をまき出高初先
 自ら鬼とんで偏身に汗を流し面土のどし主僧を多くを舞の戯り
 賓人と怖きしゆこそあまきと制はくは座空各席とてゆく餘り
 と論ど其諸のさう多くの上世のこしらへて當代のまきにわくは兎角も
 うち一人の方とてやうて大に驚き荒八鳥とてあうたきとてやうて
 わき主僧の走りて眠るにかれ座空の狼狽しく四散を六席もこいたも
 のろわくさうよいかもとのさうやんと逃るに路をまき座の下にかく
 まて親より把りて路をとりしてまきとのあつたきやうとてはまきもらう

関雄の内磨呂の孫志夏の息にて世に東山進進と稱す久しかりは云
 い善まの叔父は當時の宿儒あり寺の方とてまて下とて而多條の
 古物存するもまてまてなれりて強偷新碑も世に名傳の又外え
 やまてまてまて時杜撰の者もるに名をまてまてまてまて
 わりて自身と音る類と比まて王と瓦とのなれりもわりて陽とく
 まりてまてまてまて武をた仰 粧台足下の上はにわりてまて
 六郎云古佛の足下の毒子にあり舊碑のまてまてまてまて
 不幸にありてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
 徳ありてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
 義満の師範とてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
 わりてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
 まて存余してまてまての忠戦まてまてまてまてまて
 まて存余してまてまての忠戦まてまてまてまてまて

卷之三



錯日奇觀卷之三終